平成１２年（2000 年）

三宅島噴火災害誌

平成１９年３月

東京都

三宅島噴火災害誌の発刊にあたって

平成12年の三宅島噴火災害では、三千余人の島民は三宅島からの避難を余儀なくされ、さらに４年５ヶ月に及ぶ長期間の避難生活を強いられるという、わが国災害史上例のない被害に見舞われました。

災害発生後、東京都は、一刻も早い帰島を実現すべく国や関係機関と連携し、砂防ダムの建設や道路・ライフラインの復旧を図るとともに、都内区市町村や全国の自治体の協力を得て、三宅村とともに避難中の島民の生活確保などに全力で取り組んできました。こうした努力の甲斐もあり、平成17年２月１日、三宅村長が避難指示を解除し、島民の帰島が実現しました。

それから２年が経過した現在、火山ガスの噴出は未だ止まず、高濃度地区の居住制限も継続されていますが、観光客は徐々に戻りつつあり、復興に向けて三宅島は着実に前進しています。

これまで東京都は、被害を受けた住宅の修繕費助成、農地や漁港の復旧など、島民の皆さんの生活基盤の確保に努めてきましたが、元の島に復興するには、何よりも島民皆さんの努力が不可欠です。島の新たな発展に向け、果敢にチャレンジしていただくことを期待しています。

本誌は、三宅島噴火災害における一連の災害対策活動を取りまとめたものです。災害で得た教訓を時の経過とともに風化させず、21もの火山を抱える東京都の噴火災害対策に活かしていく必要があります。国や防災機関の皆様には、これまでのご協力に感謝申し上げますとともに、今後の災害対策に本誌をご活用いただければ幸いです。

また、長期にわたる避難生活中だけでなく帰島後も、ボランティアの皆さんの支援や多くの義援金や見舞品が全国から寄せられ、島民は勇気づけられました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

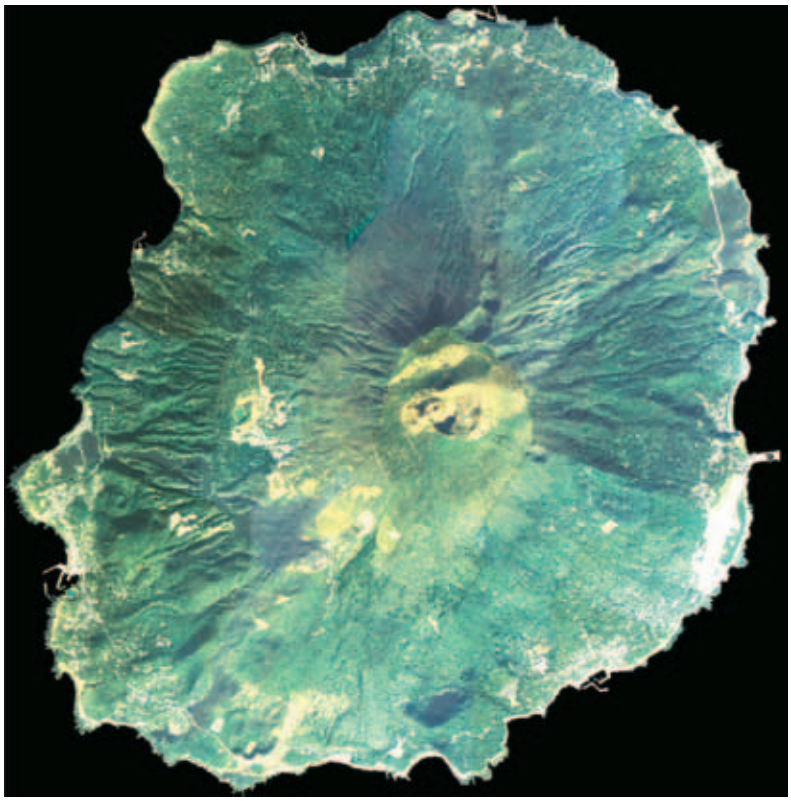
今後復興を進めていくにあたっては、なお多くの困難があると思いますが、島民の皆さん一人ひとりが知恵と力を出し合い、新しい三宅島を築いていくことを願っています。

平成１９年３月

東京都知事

石原慎太郎

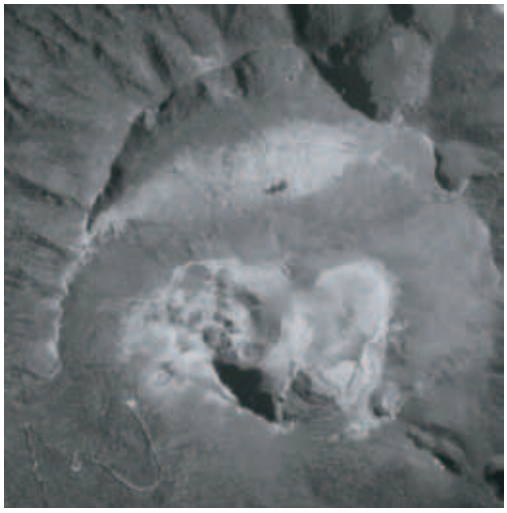
俯瞰写真に見る三宅島の変容



平成 11 年 12 月撮影

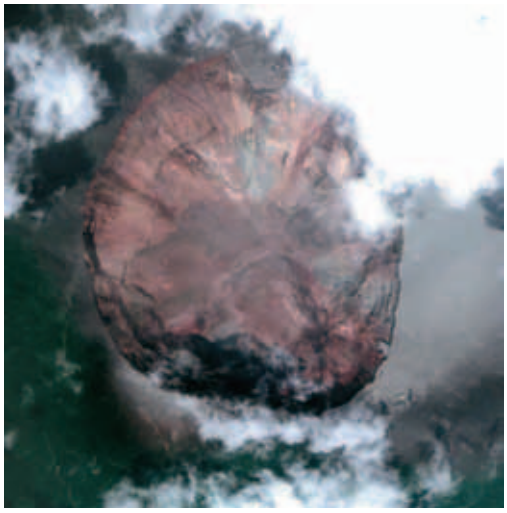
平成 13 年 6 月撮影

火口の変化



噴火前（平成 11 年 10 月 6 日）

噴火後（平成 12 年 7 月 9 日）



再噴火後（平成 12 年 7 月 19 日）

再々噴火後（平成 12 年 8 月 25 日）

噴火の模様

平成 12 年 7 月 14 日の噴火

平成 12 年 8 月 10 日の噴火

平成 12 年 8 月 18 日の噴火

御蔵島から望む平成 12 年 8 月 18 日の大噴火、噴煙は高さ 1 万 4000mに達した
平成 12 年 8 月 18 日の大噴火。全島に大量の降灰、泥流被害をもたらした。

村役場上空に迫る噴煙

バスに迫る噴煙

平成 12 年 8 月 29 日の低温の火砕流（伊豆沖合約 6km より）

火　山　灰

山腹に堆積した火山灰

都道沿いの樹木に堆積した火山灰（釜の尻）

泥流・土石流による被害

（大沢）

（大沢）

（阿古林道）

（村営牧場付近）

（椎取神社）

（村営牧場）

泥流による家屋被害

（三池）

（差茂井）

火山ガスによる被害

（三池）

（赤場暁）

島内の避難

三宅小・中学校に避難した島民

三宅小・中学校に避難した島民

三宅小・中学校に避難した島民

避難所の島民を激励する石原知事（平成 12 年 6 月 29 日）

島外への避難

島外避難する島民

見送る防災関係者

東京オリンピック記念青少年総合センターへの避難

避難先での説明会

ふれあい集会

一時帰島

三池港

伊豆避難施設

げ ん き 農 場

帰　島

帰島第一陣出発式（港区竹芝）

帰島に向け乗船する村民等

帰島する三宅村民を見送る人たち

三宅島三池港に到着した村民

島での生活の再開

商店（神着）

三宅郵便局（神着）

天皇・皇后両陛下行幸啓

げんき農場（平成 14 年 3 月 18 日）

ゆめ農園（平成 15 年 4 月 30 日）

北区桐ヶ丘支援センター（平成 16 年 5 月 20 日）

三宅島阿古　村役場前（平成 18 年 3 月 7 日）

坪田高齢者在宅サービス支援センター（平成 18 年 3 月 7 日）